

新たな役割を担う「内港地区」

堀川・中川運河



【港内位置図】

堀川 「マイタウン・マイリバー」として再生中

堀川は、ガーデンふ頭から北へ名古屋市市街区を縦断する16.2kmの庄内川水系の1級河川（昭和44年指定）です。「川」とはいえ、名古屋城築城時の資材運搬用に開削された運河で、当時の上流端である名古屋城脇の朝日橋まで（新堀川は中区千代田堀留まで）の水域が、名古屋港管理組合の管理する港湾区域です。

かつてその沿岸では、製材業者が軒を並べ、陶磁器原料、金属、雑貨などの荷役が盛んに行われており、最盛期には名古屋港取扱量の1/4を占めるほどでした。しかし、港湾施設の近代化と陸上輸送網の発達により、貨物輸送路としての役割は次第に衰退。一方、市街地排水による環境悪化も危惧されるようになりました。

その後、国の「マイタウン・マイリバー整備事業」による整備河川第1号に指定されたことから、治水機能の向上とともに周辺の景観や地域整備と一体となった改修が進められ、官民によるさまざまな事業・イベントが展開。平成24年10月には堀川まちづくり構想が名古屋市によって策定され、“母なる川・堀川”の再生の歩みが大きな注目を集めています。

中川運河 閘門式の“名古屋版ミニチュアパナマ運河”

明治末期以降、港勢の拡大に伴い水上交通路の強化が急務となりました。こうした中、昭和5年、中川運河は港と名古屋駅貨物停車場（旧笹島駅）を結ぶ運河として誕生。実に待ち望まれた開通でした。運河は閘門式で、水門で仕切った区画（閘室）の水量調節で昇降させた船を通過させる、いわば“名古屋版ミニチュアパナマ運河”です。中川口と松重に閘門が設置され、船の出入管理（通船業務）と、運河水位の管理（水位調整業務）が行われました。

以降、戦時中を除き輸送量を着実に伸ばし、戦後のピーク時（昭和39年）には、年間7万隻もの船が往来しました。その後、自動車輸送の増加などに伴って通航船舶が年々減少したため、松重閘門は昭和43年に閉鎖され、現在、2対の塔（昭和61年名古屋指定有形文化財）を中心とした松重閘門公園として活用されているほか、親水緑地などの整備が順次行われています。

また、平成24年10月に名古屋市と共同で策定した中川運河再生計画を、令和5年10月に更新しました。当計画方針に基づき、人々が水辺に近づき、憩うことのできる空間を目指してさまざまな取り組みが進められています。



エリア基本データ

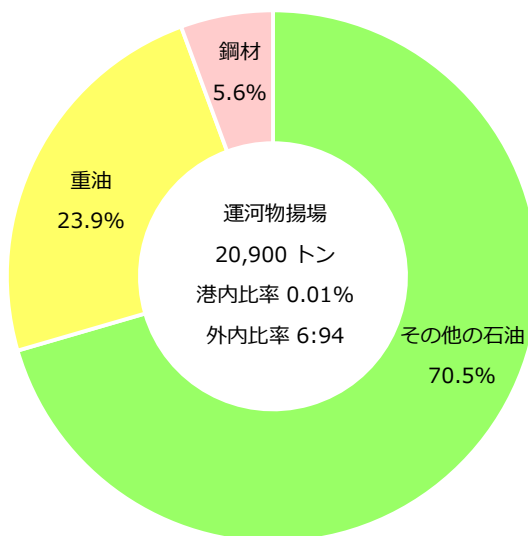
ふ頭名称 堀川右岸 中川運河 一州町

臨港地区面積 71.7ha 49.3ha 19.3ha

公共その他（運河物揚場）

係留隻数 99隻

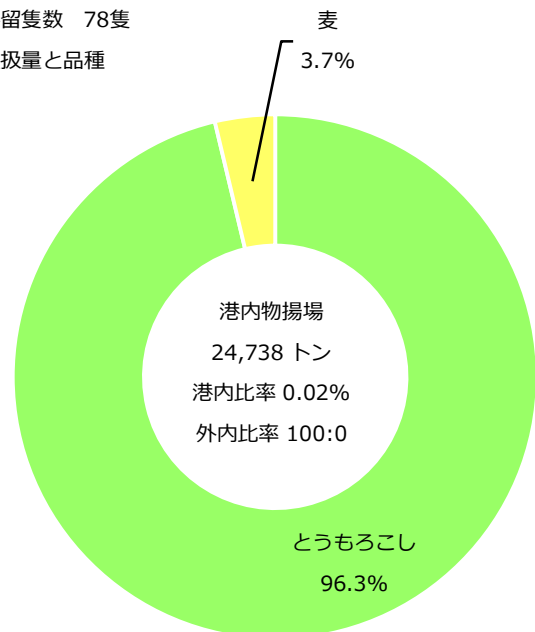
取扱量と品種



公共その他（港内物揚場）

係留隻数 78隻

取扱量と品種



公共その他（仲継（船間隣接））

取扱量と品種

